

淡路市人権教育研究協議会 定期総会は書面表決

本年4月25日から、緊急事

態宣言が発令され、市や関係団体の催事が中止・延期されました。

◆新役員紹介

会長

山添

山添 繁(二宮支部長)

副会長

上原

上原 孝(津名支部長)

織田

織田 裕行(東浦支部長)

栗山

栗山 靖(岩屋支部長)

坂恵

坂恵 正和(北淡支部長)

◆教育実践活動の重点目標

昨年度の収支決算や新役員の承認、活動方針や事業計画、予算案などの議案について、代議員の方々に賛否の表決書を提出いただきました。

書面表決は、すべての議案について、過半数の賛成をもって可決されました。

今年度も「じんけん市民

講座」、「人権を考える集い」、市内の集会所等を利用した「住民学習支援事業」は、手指消毒や3密を避けるなどの感染防止対策をして実施する予定です。

Ⅱ 地域コミュニティや各種団体の特性を生かした主体的な活動を支援するとともに、人権のまちづくりを進める。

創造をめざす実践の交流を図る。

淡路地区 人権教育研究協議会総会

5月29日に洲本市文化体育館会議室で淡路地区

人権教育研究協議会総会を、昨年に引き続きビデオ会議システム「Zoom」を使用して開催しました。約51名の方々にオンライン参加していただきました。

記念講演は、にじいろアイRuの田中一步さんと近藤孝子さんに来島いただき、性の多様性についてお話をいただきました。



記念講演「性の多様性」について話す
近藤孝子さん

コロナ禍と「エンパシー」

淡路市人権教育研究協議会

会長 山添 繁

イソップ童話に「ライオンを見たことのないキツネ」という話があります。キツネは初めてライオンを見た時は死ぬほどびっくりしましたが、次に出くわした時は怖かったけれども、初回ほどではありませんでした。そして、三度目に見た時はわざわざライオンに近寄って、話しかけるくらい平気になりました。

このキツネはコロナ禍の私たち自身ではないでしょうか。コロナ

ワクチンが行き渡り、終息するまでの道のりは決して平坦ではありません。しっかり感染対策を講じながら、コロナ差別を許さず、みんなが日常を取り戻すまで頑張りたいたいものです。英語の「エンパシー」という言葉には、自分がその人の立場に立ち、気持ちや価値観を想像する「能力」という意味があります。困難な立場や同じ意見の人に思いを寄せる「感情」を指す「シンパシー」より、「エンパ

シー」は身に付ければ、幅広く他人を受け入れられる力となります。コロナ禍で問われているのは、「エンパシー」ではないでしょうか。「ジェンダーギャップ」(社会的性差)指数は、世界の156か国の中で120

位、2020年の自殺者数は増加(とりわけ若年女性数)、子どもの貧困率は7人に1人、ヤングケアラー(介護を担う子ども)の顕在化など、枚挙にいとまがないほど、私たちが解決すべき人権課題が山積しています。

人権を他人事ではなく、自分事と考えることができるためには、ソーシャルインクルージョン(社会包摂)の社会で生きていく、支え支えられていると、一人ひとりが実感できることで可能になると思います。淡路市人権教育研究協議会は、生きにくさを抱えていても、声を上げにくい人々の心に寄り添いながら、関係機関と連携し、安全で安心なまちづくりにつなげていきたいと考えています。